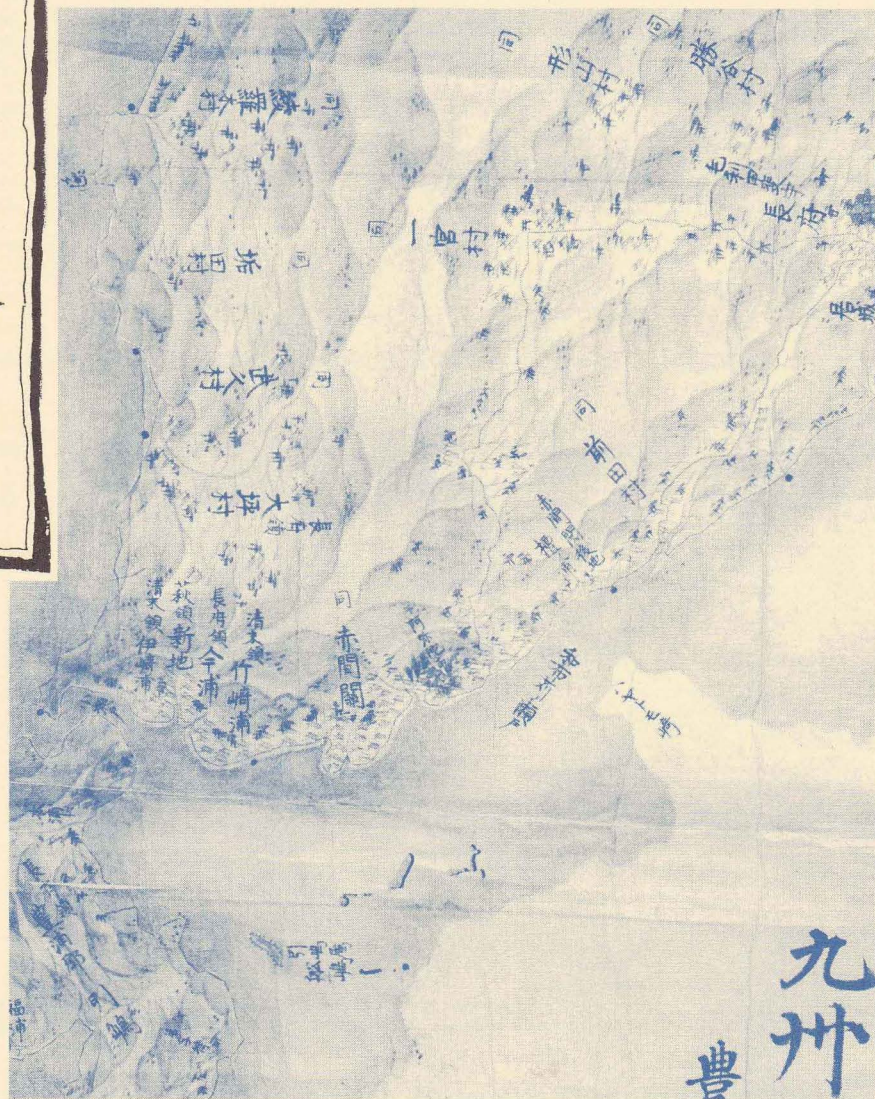


史料と伊能図

# 伊能忠敬

研究

二〇〇〇年 第二三号



伊能忠敬研究会

表紙図解説 山口県文書館蔵 伊能大図 部分（下関付近）

山口県文書館は、萩藩毛利家に伝えられた伊能大図七枚を所蔵している。「御両国測量絵図」と名付けられた毛利藩領の部分だけの伊能大図である。第一図から第七図として整理されているが、本図は第一図の下関（赤間関）周辺である。

この地域の最終版伊能大図は九州の一部も含めて描かれている筈であるが、本図では支藩・長府領の彦島はあるが、豊前側は白抜きである。

測線、地名、海岸の砂地、沿道風景などはしっかり書き込まれており、測線には針穴もある。山景の緑が青緑系で他の最終版と少し違うが、毛利侯の希望により伊能隊で制作して献呈したものと考えられる。本図の来歴に関する記録はまだ発見されていないが、御両国測量絵図という分りにくい名前をつけ、入手記録も一緒に保存されているところを見ると、ごく内々で渡されたものであろう。

伊能図の針穴は普通は測線を写すために使われるが、毛利家の大図では沿道風景の山々の頂き、田畑の表示記号の描写位置なども針穴で写されている。測線を写すための測量下図には沿道風景は無いから、もしかしたら、完成された伊能図を地図用紙に重ねて、測線ばかりでなく、沿道風景も針穴を使って写されたかもしれない。

そのような記録はみつからないが、伊能図の下図を利用したと見られる村絵図がみつかったり、内弟子から測量データを控えたメモを受け取ったという記録（五島家文書、本号）が出てきたりすると、建前はともかく、何でもありだったのかな、という気がしている。

（渡辺）

（題字は伊能忠敬の筆跡）

目次

（表紙写真解説） 目次

巻頭エッセイ

夢と歩む

歩測名人誕生！

盛大に第一回全日本歩測大会

研究ノート

伊能忠敬の房総沿岸測量（二）

ナンパ歩き

芳名録より

伊能古文書教室5

佐原邑河岸一件（二）

史料紹介

対馬藩宗家文庫『測量御用記録』

伊能家文書紹介 十六

●伊能図の三人

伊能忠敬の江戸在住日記 三

伊能ウォーク福江大会に参加して

（裏表紙） 英文目次

加藤 剛	1
福田 弘行	4
渡辺 孝雄	6
荻原 一輝	12
伊能 陽子	13
小島 一仁	14
入江 正利	19
安藤由紀子	24
佐久間達夫	29
本郷 靖枝	32

## 夢と歩む

加藤 剛

私たちの旅はこうして始まりました。

十七年間この国を歩き通して地図を作る、

そんなことができようとは。

今、私たちは歩いていきます。

生きている人も、もう世を去った人も

これから生まれてくる人も

いっしょにみんな歩いていきます。

まぶしく青く光る海岸線を行く

長い長い人の列です。

舞台は二百年前の江戸深川黒江町、朝。私は観客席に背を見せて蝦夷地測量のための歩測第一歩を踏み出しました。さすが新国立劇場、舞台奥のホリゾントに歩が届くまでには十間ともあります。真直ぐに遠ざかり小さくなっていく私の後ろ姿が客席からまだ見えていることでしょう。エンディングを迎えて高まるオーケストラ。「伊能忠敬物語」の幕切れでした。

これから十七年、忠敬は片頬に海からの風を受け、長い海岸線を歩き続けることになるのです。

測量距離約四万キロ、旅行距離三・五万キロ。地球一周の距離四千万歩を、堂々と歩いてのけてしまったこのすてきな男。



地理学者・天文曆学者・測量家としての忠敬が追い求めていたものは、この青く魅惑的な水の惑星、地球の全体像だったに違いありません。

この芝居を熱心に観劇された小渕前首相が二〇〇〇年の空をエンデバーで飛行中の宇宙飛行士毛利さんにむけて「(地表面の正確な立体地図を完成させようとしている) あなたは現代の伊能忠敬」と呼びかければ、毛利さんも「五十代になって地図作成の偉業に着手した伊能忠敬は五十代の私の励み」と応えたという、そんな宇宙交信の記事を目にしたときは実に朗らかな気分でした。暗い宇宙に丸く浮かぶ地球を見渡せる場所だと思ひ浮かべる人名として、伊能忠敬ほどふさわしい名はありません。忠敬。出身地下総の人のように親しみを込めて呼ぶなら、我等がチューケイ先生はまさに江戸時代の宇宙人、歴史教科書や偉人伝の枠などスリと脱け出し、風のように世紀を超えて自由なのです。

今も伊能家に伝えられる手書きの地球図の美しさに心奪われたことがあります。まるで満々たる青い水を湛え花を浮かべた二つの水瓶のようではありませんか。その図に見入るうち、やはりいつの世でも優れた男とは夢見る技を持つ男、先見の明ある男とは憧れを知る男のことではあるまいかと思えてきます。

さあ、この天才のビッグネームを背負い大胆にも「伊能忠敬」と我が名を名乗り、劇世界の幕をあけるのが私の仕事となりました。

もう幕あきのあの音楽が聴こえ、客席上方の「天空」には照明部苦心の星々が青く輝き、私の心の方位を定めます。何しろ幕があいてしまったら時間の流れは実人生のように待ったなし。三時間に及ぶ劇世界旅行中チューケイ先生は全シーン出通し。僅かに舞台袖へ引っ込むのは次のシーンの着替えのための三十秒以内。前のシーンがライトアウトするや暗転の舞台をまるで夜行性動物みたいに走りぬけて仕度を終え、次のライトイン前に再び舞台に滑り込みセーフ。マラソン選手が給水地点を走り抜けながら補給する要領で水分もとる暖房完備の劇場内の乾燥から喉を護らなければなりません。

そこで裏方さんの工夫。見ればチューケイ先生が舞台上で手にする茶碗はすべて本物のお茶で満たされているのです。まことに早天の慈雨、この「隠し水」によってチューケイ先生は三時間に及ぶその前半生を無事終え、大団円を迎えました。劇場は連日満員、何と新国立劇場開場以来の記録とのこと。まさに忠敬先生の遺徳といえましょう。





千種楽の舞台から、映画「伊能忠敬」へとバトンは渡されました。チューケイ先生はさらに四季を追ってカメラアイの中を歩き続けます。この隊列は尽きることがないでしょう。二百年前の測量隊は今、「伊能ウォーク」となって日本列島を一筆書き、膨大な平成の伊能忠敬たちにより世紀を越えて歩き継がれています。

優れた先人の偉業を正しく継承される伊能家、伊能忠敬研究会、そして夢とともに歩むたくさんの人々に、私は心からの信頼と敬意の念を抱いています。

写真 俳優座「伊能忠敬物語」 撮影・蔵原輝人 ©

右より 加藤 剛

岩崎加根子

# 歩測名人誕生！

## 盛大に第一回全日本歩測大会

福田 弘行

五月三日快晴の下、東京・武蔵野市の中央公園を主会場に第五回東京国際スリーデーマーチが開幕、愛好者や家族連れが新緑の武蔵野を今日は「はな」をテーマに元気に歩いた。今回はじめての試みとして各共催、後援団体の協力のもとに「全日本歩測大会」の第一回大会が会場隣接のグラウンドを舞台に開催された。

この歩測大会は伊能忠敬の測量開始二百年を記念し、一定の歩幅で歩くことで距離を測るというものでその正確さを競う。参加者には歩く距離は公表されてなく、歩幅の確定と正しい歩数を測る競技になっている。現在、全国を歩く「伊能ウォーク」でも新潟などで歩測大会を開いたが今回はその規模を拡大したもの。朝日新聞の記事は「江戸時代に、歩いて測量を始めた伊能忠敬の気分を、ちょっと体験してください」。初めてなので参加者、達人、名人の人数は予測しがたいが盛会を期待する。

スリーデーマーチの参加者は昨年より約二千人多い、過去最高の九千六百人。予選大会にはウォーク出発前とゴールしてから八百十五人が挑戦した。今回の予選会では歩幅調査区間を百メートルに設定。各自の歩幅を決定したあと第一歩測区間百七十メートル、第二歩測区間百八十八メートル、第三歩測区間二百二メートルで歩測の正確さが競われた。

ここで三つの歩測区間を通算して誤差一パーセント以内、かつ各歩測区間の誤差が二パーセントを超えない参加者が「歩測達人」と認定され、翌日の名人戦に進出する。達人は予想よりかなり多く百十五人

が認定された。

翌四日も青空で、スリーデーマーチ参加者は一万一千八百名を記録し、今日は「みず」ルートを歩いた。歩測大会は決勝の名人戦になり我と思う参加者は早朝より昨日の結果はいかにと大会本部のテント前に集合し自分の名前を確認してから名人戦に臨んだ。

さすがに、わが研究会の会員では斉藤、川上、矢能、会長夫人、平野、岩城さんなど各氏が達人名簿に掲載されていた。

名人戦は昨日と同じ場所だが単一步測区間になり距離は七百三十五メートル。距離が長くなった分、名人戦らしくなる。達人は誤差一パーセント以下が基準だが「名人」は誤差〇・五パーセント以内と条件が厳しくなっている。真剣な表情で歩数をかぞえゴールをすると表彰式の時間を確認してからウォークへ出かけていった。歩測達人七十一人が参加。小学生の部では歩測達人はでなかったが、審査委員長判定で特別参加として上位九人が出場し元気にグラウンドを歩いた。

今回の歩測大会では、距離はあらかじめ国土地理院のメンバーが最新の測量機器でミリ単位まで正確に測定されており、競技の結果の入力と集計は近隣の千川小学校に計算センターを設けパソコン十台を使い、達人、名人誕生にその威力を発揮した。

最終結果により次の八名の方々が入賞者に決定する。第一回名人の菅原さんは誤差わずかに五十四センチ、誤差率は〇・〇七パーセント、小学生名人山浦さんの誤差はたったの一〇センチ、誤差率は〇・〇一パーセントと驚異的な記録が誕生した。入賞者は大会ステージで大会会長賞、国土地理院長賞の表彰を受けた。渡辺大会審査委員長は「かなりレベルの高い大会で、参加者は経験豊富なウォーカーが多かった」と報告された。



表彰式

小学生の山浦さんは長野から母親と妹で参加。妹さんは四位に入っていた。岩附さんと小林さんはここ会場近くの学校の同級生で「とてもよい思い出ができました」とそれぞれに笑顔だった。

今回の歩測大会開催にあたっては大会前日から新潟の垣見さん、福岡の河島さんはじめ三十人近くの会員の支援があり、会場設営、競技運営などさまざまにご活動をいただき無事終了した。関係団体の担当者のみならずともどもに感謝申しあげ、来年以降に続くよう願っている。

(ふくだ ひろゆき)

菅原名人談「このスリーデーマーチには第一回から参加している。以前子供達とオリエンテーリングの経験から歩くことで方向、距離などに関心をもっていたので気軽に参加した。今度の大会で私が名人と聞いておどろいている。伊能ウォークには昨年参加できなかったのが、神奈川から一緒に歩きたいと思っている。」

〔一般の部〕

名 人	菅原 龍雄	東京・田無市	+0.546m	0.07%
準名人	加藤 知克	埼玉・狭山市	+0.830m	0.11%
"	津田 文香	千葉・千葉市	-1.220m	0.17%
"	露口 卓治	茨城・龍ヶ崎市	+1.580m	0.22%
"	江口 真	埼玉・朝霞市	+3.040m	0.41%
"	滝口 孝	愛知・名古屋市	-3.700m	0.50%

〔小学生の部〕

名 人	山浦 詩音	長野・長野市	-0.10m	0.01%
準名人	岩附 豊佳	東京・武蔵野市	+14.14m	1.92%
"	小林 里奈	東京・武蔵野市	+27.75m	3.77%



# 伊能忠敬の房総沿岸測量（一）

渡辺 孝雄

## はじめに

かねてから伊能忠敬の房総測量の足跡をたどってみたいと考えていたが、なかなか具体化することはできなかった。伊能ウォークが始まり、それに合わせるかたちで、朝日新聞千葉版に「房総を測る―伊能忠敬測量日記から―」（99・1・19～1・29）を十一回にわたり掲載する機会を得た。本稿はすでに新聞紙上に発表した内容と重複する部分もあるが、編集の方からの依頼をうけ、その時に調査した内容をもとに、まとめ直したものである。

資料としては、『伊能忠敬測量日記 千葉県史料 近世篇』（昭和63）を中心に用いている。なお宿泊地間の距離と、夜間の天体観測による緯度については、『大日本沿海実測録』と、伊能図に書き込まれている「自伊豆国距奥州及蝦夷地北極出地度里程測量」によっている。また文中で伊能中図とあるのは、「大日本沿海実測図 伊能中図 関東」（武揚堂発行）、伊能大図とは「伊能図集成 大図 小図」（柏書房発行）のことである。

## 一 房総測量の先触れ

伊能忠敬は、五十六歳から七十二歳までの十七年間をかけて日本全

国の沿岸部を中心に測量したが、房総半島の沿岸部を測量したのは、享和元年（一八〇一）の六月から七月にかけて、忠敬が五十七歳の時であった。これは忠敬にとって第二回目の測量にあたる。

忠敬は、蝦夷地の測量から帰って半年後の享和元年（一八〇一）四月二日に、第二回目の測量の旅に出発した。この時の測量は、相模・伊豆・武蔵・上総・安房・下総・常陸・陸奥沿岸の測量と、東北道を江戸まで南下するというものであった。

三浦半島・伊豆半島の沿岸部の測量が終わって、忠敬一行は六月六日に江戸深川の黒江町に帰り、房総沿岸の測量に出発したのは、享和元年（一八〇一）六月十九日（太陽暦で七月二十九日）のことである。房総沿岸測量に際して、次のような勘定奉行の触れが出されている。

## 覚

人足式人

天文方 高橋作左衛門弟子

馬壹匹

伊能勘解由

長持壹棒

右者此度伊豆・相模・武蔵・安房・上総・下総・常陸・陸奥国  
海辺測量為御用被差遣候ニ付、書面之人馬勘解由断次第、御定  
之賃錢請取之、可差出者也

西（享和元年）六月 和泉

下野

左近

飛騨

主膳

下総国 葛飾郡

千葉郡

右宿々村々  
問屋名主  
年寄組頭

上総国  
市原郡 望陀郡  
周准郡 天羽郡  
宿々村々

そしてこの触れは、房総の天領を支配していた代官により、房総沿岸の村々に伝達されている。下総国の天領を支配していた代官浅岡彦四郎は、次のような添触れを出している。

右之通御触書出候間、本紙相添相廻候ニ付、大切ニ取扱、御料私料海辺付村々不洩様此帳面江請書并刻付相記、令順達留村より江戸本所緑町自分役所江可相返者也

西六月十一日 浅岡彦四郎

下総国 葛飾郡

千葉郡

右宿々村々

問屋名主

年寄組頭

上総国の天領を支配していた代官滝川小右衛門は、上総国の海岸線の村々に、次のような触れを出している。

今般伊能勘解由廻村之儀ニ付、御勘定奉行連印村触証文差遣条得其意、証文墨付等無之様大切ニ取扱、別紙帳面江村役人共令受印、海辺者勿論其外村落無之様刻付を以早々継送り、従留り一同我等役所江可被出者也

西六月十二日 滝川小右衛門 印

これらの代官の添触れは、忠敬が測量中に泊まった宿泊先の名主の記録の中でみつけ、書き留めたものである。

この時の忠敬の身分は、「天文方高橋作左衛門弟子伊能勘解由」であった。蝦夷地に出かけた時は、「高橋作左衛門弟子 西丸御小姓組番頭津田山城守知行所 下総国香取郡佐原村元百姓浪人 伊能勘解由」と、元百姓浪人となっていたが、この表現はなくなっている。しかし「天文方 高橋作左衛門弟子」というだけで、公的な身分は与えられていなかったが、勘定奉行の触れと代官の添触れがあったため、忠敬の手元には、測量で通過した村々に関する細かい情報もたらされたらしい。その内容は、測量日記のなかに詳細に記録されている。また安房国の村々では、村役人が宿に挨拶に出ている場面もかなりみられる。こうしたことは代官所からの添触れの効果と思われる。

房総沿岸の測量に出発するにあたり、六月十八日に、伊能勘解由名で、安房国洲崎村（館山市、房総半島の南端）までの沿岸村々の名主宛てに次のような触れを出している。

覚

一 長持 老棹 此人足四人  
一 駕籠 老挺 此人足二人

## 一本馬 壹疋

右者我等就測量御用ニ付、上下六人明十九日江戸出立、海辺通陸奥国迄罷越候間、書面之人馬御定之賃錢請取之、聊無遲滯差出し繼立、且又渡船川越止宿等之儀差支無之様、且雨天其外逗留之儀も有之候間、其心得ニ而執斗可給候、以上

西六月十八日

伊能勘解由

從江戸海辺通

安房国洲崎迄

右村々宿々

名主問屋年寄 中

この外に宿については、前泊まりの場所から指示すること、食事は一汁一菜でよいことを書き加えている。

十九日からの測量については、もう一つの船橋宿までの触れを出している。

明十九日に深川を出立し、海辺に沿って船橋泊りにするので、村々で案内をし、渡船・川越に差支えないようにすること、荷物は江戸より直接行徳・船橋と継ぎ送る。外の村々の人足の差出しはしなくてよい。荷物の内測量器具を持参するので、人足一人宛て出してもらっている。十九日雨天の場合は、順延になる。

第二次測量では、通過する村々に対して、人馬の差出しだけで、測量に関しての具体的な指示は全く出してない。

## 二 測量に参加した人々

この第二回目の測量に参加したのは、忠敬を含めて六名であった。

伊能忠敬(五十七歳)・平山郡蔵(二十四歳、宗平の兄、香取郡中村〈多古町〉の平山家の長男)・平山宗平(十七歳、蝦夷地測量に続いて参加)・伊能秀蔵(十六歳、忠敬の庶出の子、蝦夷地測量に続いて参加)・慶助(十六歳、後の尾形慶助)・嘉助の六人である。

宗平・秀蔵の二人はまだ十代半ばであるが、蝦夷地測量に続いて参加している。特に実子の秀蔵は、文化五年(一八〇八)―文化六年に行われた第六次測量まで毎回参加しており、その足跡は蝦夷地・本州沿岸全域・四国沿岸に及び、測量参加日数は計一七九〇日を数える。

新たに加わった平山郡蔵は宗平の兄で、その後第五次測量まで毎回参加している。郡蔵は本州沿岸部の全測量に従事しており、測量参加日数は計一二三三日である。

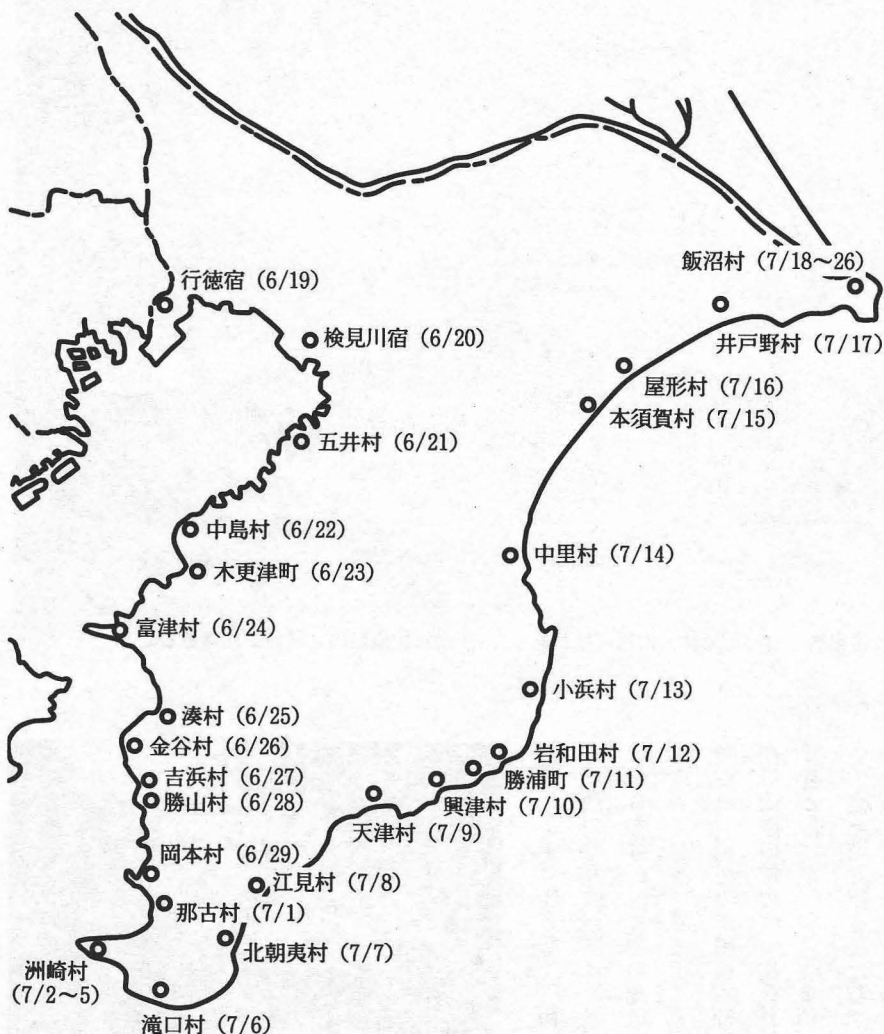
慶助は第二・三次・四次・五次(途中から参加)・八次と、本州沿岸と九州の第一回目の測量に参加し、測量参加日数は計一七四八日である。後に渡辺慎の名前で、「量地伝習録」という忠敬の測量方法についての著作を残している。なお忠敬は一〇回の測量の内、第九次測量(伊豆諸島の測量)には参加しなかったが、蝦夷地東南部沿岸から九州測量(屋久島・種子島・壱岐・対馬・五島を含む)に参加しており、その全測量日数は、計三三九七日である。

こうしてみると忠敬によって行われた全国測量は、初期の測量では、その費用が忠敬の個人負担だったというばかりでなく、測量に参加した人々も、忠敬の身内・親族・佐原周辺の人々と、主に忠敬の個人的なつながりによっていたことがわかる。幕府から忠敬に支給される一日当たりの手当ては若干増えたが、測量費用については、忠敬の個人負担であるという原則は変わってなかった。



享和元年 (1801)

房総沿岸測量時の宿泊地 (カッコ内は宿泊日)



### 三 房総の沿岸測量

第一日<sup>※1</sup> 深川から行徳まで (東京都市川市)

六月十九日 この日は晴天で、朝五つ頃 (午前八時頃<sup>※2</sup>) に、忠敬一

行は深川を出発した。又兵衛新田 (東京都江東区東砂二丁目付近) を通り、中川番所を経て小松川新田に渡り、宿泊予定の船橋宿への荷物を、途中小名木村名主に依頼している。西浮田村・東浮田村で江戸川 (伊能図では利根川と表記) を渡り、下総国葛飾郡に入った。堀江村 (二六三軒、浦安市) 猫実村 (二二七軒) 当代嶋村 (四〇軒) 新井村 (七三軒、市川市) 欠間々村 (一八〇軒) 湊新田 (浅岡彦四郎代官所支配、五七軒) 湊村 (二〇二軒) 押切村 (七六軒) と測量し、日暮れとなってしまった。宿泊予定の船橋宿に着く前に日が暮れてきたため、急遽船橋泊まりをやめて、行徳での泊まりの触れを出し、夕刻六つ (午後六時頃) に、本行徳村 (市川市) の名主惣右衛門宅に着いている。この日の宿泊予定地の船橋宿にすべての荷物を運んであったため、着替えもなく、不自由をしたと、日記に書いている。小松川新田から押切村辺の道は竹藪やすすきなどが茂り、往来にも困難な状態で、測量がはかどらなかった。高橋至時が忠敬に宛てた手紙のなかで「中川より先はすすき原や小竹の原で測量に手間取ったとのこと、ご苦勞の程



加藤新田の塩田風景 右端の松林内に稲荷社があった（「山水加藤新田之晴景」加藤家蔵）

を察します。仕方なく行徳に泊った由」と、その苦勞をねぎらっている。夜間の天体観測は道具がなかったため行えなかった。この日の深川から本行徳村までの測量距離は、二里三五町三九間半（二一六八・八メートル）であった。この日の宿となった本行徳村の名主惣右衛門家は、現在の市川市本行徳の加藤竹男家である。加藤家の位置は、江戸川岸の常夜塔（文化九年建、市川市指定文化財）に間近く、行徳街道に面している。加藤家は、加藤新田の開発者であり、塩造りも行い、代々塩問屋を業とし、惣右衛門を名乗っていた。かつて加藤新田にあった石造の稲荷大明神の社が、現在屋敷内に祀られており、加藤家と加藤新田の歴史を伝えている。

本行徳村と日本橋小網町との間は、行徳船とよばれた定期船で結ばれており、江戸と房総を結ぶ交通の要所であった。海岸線一带は行徳塩とよばれた塩の一大生産地であった。徳川家康が江戸に入国し、上総への鷹狩の途中でこの地の塩造りをみて、積極的に保護したといわ



稲荷社（加藤家屋敷内）

れている。江戸時代前期がその最盛期であり、次第に瀬戸内海沿岸の良質の塩が江戸に運ばれるようになると、行徳塩の生産量は減少した。それでもこの頃の堀江村から西海神村まで一六ヶ村の塩田面積は一三六町余あったという。本行徳村はそのなかでも塩生産の中心地であった。

※1 房総測量の日数を示すために、便宜的につけたものである。

第二次測量が始まってからは、第七十七日目にあたる。

※2 測量隊が出発した時刻、到着した時刻についての現在の時刻への換算は、目安として注記したものである。厳密にはこの時間とは少しずれる。

※3 忠敬の測量日記には、通過した村の村高・領主名・家数・人数等いろいろな記載があるが、ここでは家数・人数を主に注記した。領主名は、伊能大図では、村名の上に注記されており、記録しておく必要があった事項である。

なお日記に書き込まれている村名は、すべて伊能図に書き込まれており、気が付いた範囲であるが、日記の表現と異なる場合は、本文のなかで注記した。

第二日 行徳から検見川まで(市川市→千葉市)

六月二〇日 明け六つ半後(午前七時過)に宿を出発している。晴れたり曇ったりの天気のため、海岸線に沿って測量を行った。儀兵衛新田(一軒) 加藤新田(一軒) 本行徳(三六〇軒) 下妙典村(八九軒) 上妙典村(七六軒) 高谷村(八五軒) 原木村(五四軒)、西海神村(九一軒、船橋市)と、海岸線には塩田が続いていた。原木村については、測量日記に「先年の津波にてこわされた家が五八軒、溺死者は村方で一一三人・入込人で四〇人」と、寛政三年(一七九一)八月におこった津波による多数の溺死者を記している。

船橋海神・船橋九日市入合(六五〇軒) 船橋五日市(三八〇余軒)と船橋の海岸線を測量した。船橋は、船橋海神村・船橋九日市村・船橋五日市村の三村を総称して船橋村と称した。房総往還の要所であり、宿場町として賑わっていた。この当時船橋九日市村には、本陣があり、また旅籠は二二軒を数えた。(千葉郡に入る)谷津村(一〇八軒、習志野市) 久々田村(一八五軒) 鷺沼村(二七〇軒) 馬加村(三五〇軒、千葉市)を経て、七つ半(午後五時頃)に検見川村(三五〇軒、千葉市)に着いている。

この日の本行徳村から検見川村までの測量距離は、四里七町三七間(二六四三〇・三四メートル)であった。伊能中図をみると、馬加と検見川村との間の地と、富士山・大山(相模国)に方位線が入っており、この地の海岸線からこの二つの山の方位を観測していることがわかる。日記には泊まった場所として、「宿清治郎」と記している。曇天のため夜間の天体観測はできなかった。検見川で宿泊した清治郎家については、忠敬が泊まった年から五四年後の、安政二年(一八五五)の検見川村の記録(千葉市柏井 川口家文書)により判明した。当時の検見川村の家数は四一三軒・人数は三三五四人で、旅籠屋が七軒あった。そのなかに、「旅籠屋 百姓 鹿島屋清次郎」という名前がある。忠敬たちが泊まった場所は、この旅籠屋だった可能性がたかい。場所の特定はできないが、略図の位置から、現在も続いている上総屋旅館(安政二年では「旅籠屋 上総屋宇左衛門」とある)より稲毛よりの小字でいう「西中宿」辺と思われる。

なおこの日に通過した村について伊能大図では、測量日記と同じく「原木村」となっているが、伊能中図では、「原太村」と記されている。また西海神村は、伊能中図では、「西海上村」と表記されている。

(この項つづく)



## ナンパ歩き

荻原 一輝

私は整形外科医として昔から「歩行」と云う事に興味を持っていた。誰でも、遠い昔に小学校入学の時に「歩き方」を習った記憶があるだろう。先生が手を叩いて「はい右足。はい左足」との声で、「右足と左手を出す、左足と右手を出す」と云う事だが、必ず何人かは「右手右足、左手左足」と出して注意をうける子が居たのでは無かろうか。実はこの「右手、右足。左手、左足」というのが「ナンパ歩き」と呼ばれる歩き方である。

我々が習ってきた、そしてそれが正しいと考えている「右足、左手。左足、右手」と云ういわば体を捻ったような歩き方は、我が国では明治以後に入ってきたと云われている。それまでは同じ側の手と足を一緒に出していた由である。それでは「走る」と云う事が出来ず、明治の始めの軍隊では兵隊が上記の捻り歩きが出来ない為に、その訓練に手間取ったとのことである。

そういえばあの「殿中での刃傷の時に浅野内匠頭を押さえに走った武士の走り方」を思い出して欲しい。廊下を「走る」のだが左手で刀を押さえて、右肩、右足を出しているだろう。

私が初めてこの言葉を知ったのは「日本医師会ニュース」の南原征哲先生の記事であった。早速先生に手紙を出して「東大養老教授と武術研究家甲野善紀の対談集」を教えて頂いた。その本では「昔の庶民にとって速く走るというのは今なら泳げるというくらい一つの技術だった」とある。「一生涯走ったことがないと云うのが普通の人であっ

た」とも書いてある。「走る」というのはいつでも刀を抜けるような独特の走り方と云うのである。

これを知ってからこの歩き方についてもっと調べたいと思っているが、殆ど資料がない。ここに書いたのは皆さんにお知らせするのでなく、むしろ何かご存じのことを教えて頂きたいと云いたいのである。宜しくお願いしたい。

(おぎはら かずてる・荻原整形外科病院長)



『絵本駿河舞』より

芳名録より

——佐原伊能家を訪れた人々——

宮島を

古地図に

見ゆ

昭和十一年  
初夏

六月  
一日  
葛原しげる

※ 葛原しげる（一八八六—一九六一）

大正・昭和期の童謡作家。葛原句当（幕末・明治期の箏曲家）の孫。東京高師（東京教育大）卒。精華小学校、女子音楽学校跡見高女などで教師をつとめるかたわら、「夕日」や「とんび」などを代表とする唱歌・童謡一二〇〇余を作詞、「大正幼年歌集」「大正少年歌集」を刊行する。  
（三省堂コンサイス人名事典）

地図を前にすると、ほとんどの人が自分の住んでいるところを見つければ、次に故郷を探すようだ。葛原しげるは岡山県生まれだが、祖父は備後（広島）の人というから、地図のなかに宮島を見つけ心をときめかしたのだろうか。

かなり傷んだ『葛原しげる童謡集』が私の手元にある。

装幀は武井武雄画伯、作曲者として弘田龍太郎、小松耕輔、宮城道雄、中山晋平などの名が連なっている。昭和十年発行のこの本は私にとって大切な宝物。幼い頃、学校ごっこの教科書として兄に暗唱させられた思い出、早くに死別した父が残してくれた、数少ないつながりが込められている本なのである。

芳名録の中に「葛原しげる」の名を見つけたときは、そんな訳で少々感傷的になってしまったが、どんなきっかけで佐原までお出でになったのか、水郷のあやめ見物をかねて立ち寄られたのか、限られた文字の中から、あれこれ想像するのも、芳名録の頁を繰る楽しみの一つである。

伊能 陽子

『佐原邑河岸一件』(一)

小島 一仁

見落されていた記録

『佐原邑河岸一件』は、安永三年(一七七四)、忠敬が二九歳のときに自らまとめたものであり、おそらく、忠敬がつくった最初の記録であろうと思われる。一冊で、墨付紙八三枚、四〇〇字原稿用紙に直すと七〇枚ほどの記録である。

その本文の文字は、忠敬ではなく別人の筆になるものであるが、表題の『佐原邑河岸一件』と末尾に記されている「明和九年辰二月同七月兩度河岸一件、安永三年極月相究、伊能三郎右衛門忠敬」の文字は、忠敬自身が記したものである。また、この記録については『佐原村川岸運送相究候一件』と題する下書も残されているが、これは全文を忠敬が書き記したものである。従って、この記録を忠敬がまとめたということについては、疑いをさしはさむ余地はない。

ところが、この記録のことは、忠敬伝の「決定版」といわれた大谷亮吉氏の名著『伊能忠敬』(一九一七)にも全く出てこない。大谷氏は、明治四一年(一九〇八)八月に、帝国学士院から忠敬測地事蹟調査書を囑託されると、直ちに、佐原の伊能家におもむいて、忠敬の遺著・遺品の調査にあたった。このとき大谷氏は、忠敬遺著の『奥州紀行』、『旅行記』(関西旅行)ばかりでなく、『旌門全鏡類録』、『伊能豊

秋日記』等の重要史料も「発見」し、自著に活用したのである。にもかかわらず、大谷氏は『佐原邑河岸一件』については、一言半句もふれていない。まことに不可解なことではあるが、大谷氏は、何らかの事情で、この記録の存在を見落してしまったのであろう。そのため、この記録については、はからずも、一九七八年に、わたしが『伊能忠敬』(三省堂)を出したときに、はじめてとりあげることになったのである。

急 回 状

一件の内容に入る前に、この記録の末尾に記されている忠敬自身の署名をお目にかけておこう。忠敬が「忠敬」と自署した例は少く、めずらしいといってもよいくらいだからである。

明和九年辰二月同七月  
安永三年午極月相究

伊能三郎右衛門忠敬

忠敬は公文書にも私信にも「三郎右衛門」「伊能三郎右衛門」、隠居してからは「伊能勘解由」と署名している。測量先から、佐原にいる娘の妙薫や長男の景敬、その妻のりて等に宛てた手紙には、「東河父」「東河老父」などと書くことが多かった。「東河」とは忠敬の号である。「忠敬」という署名は特別のとき以外は行わなかった。

さて、前号に記した牛頭天王祭祀事件から三年たって、二七歳のとき、忠敬は、はじめて、公的なむつかしい問題にかかわった。



A 『佐原邑河岸一件』

急回状

其村々川岸運上之儀遂吟味候間、  
此書附着次第、名主組頭百姓代印形  
持参、早々可能出候、差急候間、来ル  
十九日迄二可能出候、此回状早々相廻し  
留村より可相返者也  
十一月十五日 遠藤兵右衛門役所

B 『佐原村川岸運送相究候一件』

急回状

其村々川岸運上之儀遂吟味候間、  
此書附着次第、名主組頭百姓代印形  
持参、早々可能出候、差急候間、来ル  
十九日迄二可能出候、此回状早々相廻し  
留村より可相返者也  
十一月十五日 遠藤兵右衛門役所

神谷新助  
佐原村  
津の宮村  
石村々々

この年、幕府では、田沼意次が老中となった。いわゆる田沼時代がその最盛期をむかえたのである。田沼の政策の特色は、発展しつつある商品経済を利用して、幕府財政のたて直しをはかることにあったといわれている。その一環として、関東一円の川筋の村々に河岸問屋を公認して、運上金をとりたてることがはじまった。

この件は、佐原村では、結局、伊能三郎右衛門（忠敬）と伊能茂左衛門の二軒の家が河岸問屋として認められることによって落着いたのであるが、それに至るまでには、村内での寄り合いや勘定奉行所への呼び出し、そこでの役人とのやりとりなどかなりの曲折があった。『佐原邑河岸一件』は、忠敬が、当事者の立場から、その経過をとりまとめて記したものである。

明和八年（一七七二）十一月二五日、佐原村年番名主の五郎兵衛のところへ、代官所からの急回状が届けられた。それが、佐原村に於ける川岸問題の発端となった。次に、その急回状を、『佐原邑河岸一件』とその下書の『佐原村川岸運送相究候一件』の両方からぬき出して、ならべてみる。

△Bの釈文▽

急回状

其村々川岸運上之儀遂吟味候間

此書附着次第、名主組頭百姓代印形

持参、早々可能出候、差急候間、来ル

十九日迄二可能出候、此回状早々相廻し

留村より可相返者也

十一月十五日 遠藤兵右衛門役所

A はなかなかの麗筆で、女手のようである。ことによると、忠敬の妻ミチの筆跡かとも思われるが、確証はない。

B は忠敬の自筆である。A の下書として記されたものであるが、か

（以下、村名略）

この急回状の内容は「河岸運上吟味のため、名主・組頭・百姓代はすぐに出頭せよ」というのである。河岸問屋の公認と運上金のとりたてが、佐原村でも、目前の問題になってきたのであった。

河岸問屋は、陸上を馬ではこばれてきた荷物を川船に積んで送り出し、また、船積みされてきた荷物を陸にあげて馬に積んで送り出すのをおもなしごととする。荷主からは荷物の請払いの手数料や運賃をとる。舟持や馬持には運賃を渡す。その間、一時、荷物を預かることも多い。その場合には預かり料をとる。多量の荷物を預かるには倉庫が必要である。資力のないものには、なかなかできぬ商売であったが、佐原村には裕福な商人が多かったので、実際に河岸問屋を営む家が何軒もあった。しかし、これからは、幕府から公認されなければしごとではできなくなるし、公認されれば、運上金を納めなければならなくなる。問屋に運上金がかかれば、手数料や預かり料も高くなるであろう。これは、問屋ばかりでなく、川舟運送に関係のあるもの、ひいては、佐原の商人全体にとっての問題でもあった。

急回状が届くと、佐原村では、村役人をはじめとして、有力な商人や舟持らが集って、何回も対策を相談した。村役人たちは、村請（むらうけ）定の家を問屋ときめずに、村として運上金を請負う。これならば、従来通り、實際上、どの家でも問屋のしごとができる）にするのがよいという意見であったが、商人や舟持たちには、何とかして、幕府の問

四人の物代は、勘定奉行所に出頭すると、村での話し合いにしたがって、「河岸役相止の願」を申しのべた。『佐原邑河岸一件』には、そのときの様子が次のように記されている。

[illegible]

一同、國新より参り

——〈中略〉——

河津川舟屋より火より船  
新上と云ふ船屋より火より船  
岩屋より送物と云ふ通船より火より船  
以て

〈釈文〉

右四人のものと罷出、御吟味奉承候所  
佐原村之儀、利根川と八十四五町相隔り  
商人も御座候へとも何れも百姓にて、荷物  
積出し候節ハ田舟を以用水江間より利根  
川江船出し候、一体、佐原村之儀ハ月二六度  
市立申候て、近在より商人入込売買  
仕候ニ付、運送も御座候、然る所、御運上場ニ  
相成候ては諸荷物江掛もの等多相成  
諸商人も諸荷物も減少仕候へハ、佐原村  
一同之困窮ニ相成候——〈中略〉——  
何卒、川岸運上御免被成下候様ニ  
願上候所、被仰聞候は、左様ニ候ハ、隣河  
岸問屋之送状を以通船可致と被仰附  
候ニ付：

要するに、惣代たちは、河岸運上金をまぬがれるために、佐原村は利根川とは十四、五町もはなれていて、運上金を上納できるような河岸場ではないと申し立てたのである。ところが、そのために、奉行所の役人から、「それなら、佐原村での運送は、隣河岸の問屋の送り状によって行え」——佐原村には、河岸運送の権利を認めない——と極めつけられてしまったのである。

惣代たちは、あわてて、すぐに村請を願ったが、それも認められな

かった。そこで、口書をとられる前に、村民たちと相談したいと申しのべ、翌年正月二十日までの日延べを願って十二月二日に帰村した。

ところで、先に掲げた文中、五行目に、「(利根川江) 船出し候」とある。この「船」という字をどう読めばよいのであろうか。下書の文字と照し合せてみても「船」と書いてあることはまちがいないと思うのだが、この文字は、『大漢和辞典』『康熙字典』にも見当らず、『異体文字字典』にも出ていない。また、他の文書でもかつて出合ったことのない文字である。意味は、「積出し」「送り出し」などのように推測されるが、読み方に困った。これに似た字で「舫」というのがあるが、これなら「もやう」である。ことによると「舫」の書きちがいかとも思うが、どうであらうか。

問屋名目引き請けの願書

惣代らが帰村すると、佐原村では、十二月中に一、二回寄り合いがあったが、年が明けて、正月九日、伊能三郎右衛門(忠敬)・永沢次郎右衛門・伊能茂左衛門・伊能権之丞の四人の連名で回状が出され、翌一〇日に、清浄院で会合が行われた。このときから、忠敬が主導的な動きをはじめている。

この会合では、まだ村請にこだわる者もいたが、結局、佐原村に運送の権利を獲得しておくためには、誰かが問屋を引き請けねばならぬであろうということから、参会者の意見で、回状に名を連ねた四人の者に問屋名目を引き請けてもらいたいということになった。

この四人は、いずれも、佐原村有数の資産家であり、高瀬舟も所有していて、むかしから水運に深いかわりをもっていたからであらう。また、村の惣代としては、名主次左衛門(治左衛門)と組頭宗右衛門

(惣右衛門)の二人は、前と同じであつたが、他の二名は別人と交代した。

ところが、その三日後、永沢次郎右衛門は、母が反対しているという理由で、問屋名目の引請けを断り、村人たちの再三の頼みにもかかわらず、ぬけてしまった。

その後、忠敬や惣代らが江戸に上つて、いよいよ、伊能三郎右衛門・同茂左衛門・同権之丞三名による問屋引請けの願書をつくらうというときになって、今度は、権之丞が反対しはじめた。忠敬の記すところによると、権之丞は、かねてから縁故のある水戸家をたよつて、忠敬らとは別れ、有利な条件で問屋を公認してもらおうと考えていたらしい。そのことから、三人で問屋を引請けるということも御破算となり、最終的には、忠敬と茂左衛門の二人が問屋引請けの願人となり、惣代たちと連署で、勘定奉行所へ願書を出すことになった。

その願書の後半、惣代らの申しのべの部分だけを、次に紹介しよう。

名主惣代治左衛門組頭惣右衛門船持惣  
代兼百姓惣代利右衛門金蔵奉申上候、私共  
河岸運送高之儀は別紙申上候通、御座候、  
然、前書三郎右衛門茂左衛門申上候通相違無  
御座候、尤私共河岸之儀は高瀬舟小舟共  
ニ七拾艘ニて先々より運送仕来、右両人之者  
とも儀は古来問屋と申唱候得とも、近年  
河岸場不取締候故自然と相休候始末、  
相成候ニ付、何卒願之通右両人之者、以来  
迎も問屋ニ被仰付、河岸役錢上納仕候  
様ニ相成候得は舟持荷主共惣百姓一統ニ  
甚勝手ニ相成、差障等決而無御座候間、私共  
一同ニ奉願上候、何卒御慈悲を以御聞濟  
被成下候ハ、難有奉存候、以上

### △釈文△

名主惣代治左衛門組頭惣右衛門船持惣

代兼百姓惣代利右衛門金蔵奉申上候、私共

河岸運送高之儀は別紙申上候通ニ御座候、

然、前書三郎右衛門茂左衛門申上候通相違無

御座候、尤私共河岸之儀は高瀬舟小舟共

ニ七拾艘ニて先々より運送仕来、右両人之者

とも儀は古来問屋と申唱候得とも、近年

河岸場不取締候故自然と相休候始末、

相成候ニ付、何卒願之通右両人之者、以来

迎も問屋ニ被仰付、河岸役錢上納仕候

様ニ相成候得は舟持荷主共惣百姓一統ニ

甚勝手ニ相成、差障等決而無御座候間、私共

一同ニ奉願上候、何卒御慈悲を以御聞濟

被成下候ハ、難有奉存候、以上

三行目の佐原の「河岸運送高」については、別紙に「一米石 凶年

ニは甲乙御座候、凡壹万俵程 一薪 高瀬舟ニて凡拾八艘程 外 諸

品売荷負数不相知」と記されている。この願書は、簡単にいえば、

「三郎右衛門と茂左衛門は前から問屋を営んできたので、この度も、

この両人を問屋として認めてもらいたい」と願ったものである。しか

し、この願いは、すぐには、うけ入れられなかった。実は、これから

が問題だったのである。

此等問屋は古来河岸役錢上納仕候  
極、おれ等も舟持荷主共惣百姓一統ニ  
ニ御座候、尤私共河岸之儀は高瀬舟小舟共  
一同ニ奉願上候、何卒御慈悲を以御聞濟  
被成下候ハ、難有奉存候、以上



【地域史料】

対馬藩宗家文庫

『測量御用記録』

入江 正利

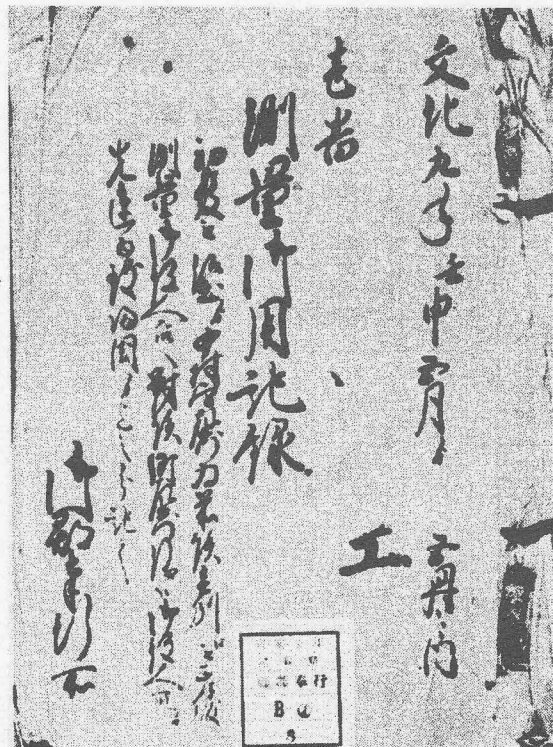
長崎県立対馬歴史民俗資料館には朝鮮信使関係等、多くの古文書が残されていて、宗家文庫として有名である。その中に『測量御用記録』の壹番・参番・四番・五番の四冊が残されていることを、長崎県立図書館の郷土課の蔵書である対馬歴史民俗資料館の宗家文庫目録で知った。

早速知り合いの方をお願いして、四冊すべてを撮影して送っていただいた。現像してみると、約千百ページにも及ぶ膨大な記録であった。それまで私は古文書の知識は全くなく、途方にくれたが、伊能忠敬研究会にも所属され、島原地区の歴史に詳しい松尾卓治氏と、長崎市にお住まいで、長崎県近世古文書研究会の三浦豊久氏のお二人にお願いしたところ、私が解読したものを添削するという方法であれば手伝っても良いとの快諾を得られた。

それから毎日辞書を片手に解読を進め、数文字の不明は出たものの、終えることができた。これには宗立人氏、対馬歴史民俗資料館、撮影して下さった道脇氏、添削をお願いした松尾氏、三浦氏のご協力に感謝申し上げる。

『測量御用記録』は先にも述べたように、全四冊が現存し、式番が欠本かと思われたが、解読を進めていくと謎が解けた。最初は五冊の記録にまとめ上げる予定であったものが、式番の予定の部分が壹番の後部に付け加えられたことが、壹番の終わりのほうに書かれてある。

その内容については順次述べていこう。



まず、壹番の表紙(右写真)を見ると

文化九年壬申五月

五冊之内

工

壹番

測量御用記録

初発被 仰出方中村郷左衛門為前談老州江被差渡  
測量御役人衆へ対談、郷左衛門儀ハ御役人衆へ  
先達而致帰国候迄之分記之

御郡奉行所

とあり、続いて

文化九年壬申五月十七日左之御廻達有之

測量御用として天文方御役人所々廻国

之段、去未十二月御勘定奉行御留守居

御呼出御達有之、右御役々当三月薩州

鹿児島江到着、役所之先触別紙

写之通此度相達、尤爰許到着之

比合ハ未相知候付、相知次第止宿取賄方等ハ

可相達候、就夫此節別紙書上案巻冊

相渡候ニ付、案文之通筋々委細吟味役談

之上、夫々仕立取調可被差出候、以上

五月十七日

年寄中

與頭衆中

寺仕方共ニ

町奉行中

御郡奉行所

屋敷方改役中

請役中

との知らせを受け、文化八未十一月の日付で、老中牧野備前守忠精よりの先触の写しが書かれている。この部分は書上の書き方も含め、他の地区でも写しが残っているものと思われるので、省略させていた

だ。

対馬藩は朝鮮とのつながりが非常に強く、文化八年（一八一一年）

には府中（現在の厳原）に於いて、それまでの朝鮮国からの信使の江

戸参礼を改めて、聘礼式を宗氏が行っている。幕府からも多くの上使が参列の為に對馬を訪れている。これには相当な費用がかかったはずである。その一年後には測量御用の達しがあり、二年後には測量隊が到着するとあっては、對馬藩としては困惑したのでは無からうか。現に、文化七年八月には予定を変更してほしい旨の要望が出されている。このことにより、對馬の測量は第七次測量に含まれていて、通達が出されていたことがわかる（渡邊一郎『伊能測量隊まかり通る』参照）。そして、書上の見本として、文化七年十一月に書かれた『細川越中守様御領分書上写』の内、肥後八代郡横手村と八代村の分が事細かに全ての項目について書き写されている。それを参考に、對馬ではどのような書上を作成すればよいかを、文化九年十二月十三日に御郡奉行所から御郡支配へ、十二項目についてお伺いをたてている。その一例として

一 村々村迄里数之儀ハ大絵図之旨を以書載

可仕、井方角之儀ハ大絵図之分間を以直針ニ

写し候ハ、凡そ相知可申候故、夫を以書載可仕哉と

奉存候

ここで大事なのは大絵図についてである。他の藩も元禄時代に幕府へ提出した国絵図等を忠敬の測量隊に貸し出しているが、元禄十三年（一七〇〇年）二月四日に提出した對馬藩作成の国絵図の完成度は非常に高く、忠敬も坂部もその出来映えに感心している。この写しは對馬歴史民俗資料館に現存している。

これらの書上や準備すべき物等の質問への答えは年寄中も正確な情報を持ち合わせず、断片的な情報として

一 ぼんでん

右根方三四寸廻り之直成ル竹二間老尺ニ切ニ而、頭ニ葛苧又ハ角取紙等結ヒ付有之、是ハ測量之町間繩之留リ且ツ道筋屈曲之場所々々江立候由

一 小杭

右其村抱之場所へ立置候由、尤是ハ何町何村と書載有之由

一 大杭

右其日測量留リ、或ハ二筋道等有之左ニ廻り測量有之候得ハ、重而其場所へ廻り来、右之杭ニ引合有之由

右三品田代ハ差越候、手本之通ニ

一 道法老里程充ニ休息之切組相設、ばんこ式参問程ツ、相備置候由

一 海辺之儀ハ小船ニ而測量有之、尤屈曲之場所々々宮職船之職等相立候由

を用意し、村境には二方を削った長さ老間程の杭を建て、太い文字で村名を書くよう指示している。

文化十年正月十八日には御郡佐役の中村郷左衛門を測量方役人の廻役人として任命し、

一 御国絵図老枚

一 同御記録式冊

一 同郷村帳老冊

一箱入

一 対馬国神社帳老冊  
一 同寺院帳 老冊

一袋入

を持たせ、二月六日老岐勝本へ向かわせている。

対馬測量の陰の功労者は、この中村郷左衛門といえる。任命されて老岐へ渡海する迄の間にも、上役と数々の折衝を重ね、元禄の絵図を使用して距離の下調べをするなど、孤軍奮闘の感がある。これらはすべて天候風向きとともに日記に書き留めている。

老岐勝本に於いても、茶屋番の祝郡兵衛の病死という不幸があったが、国絵図の検討を重ねて一冊の対州絵図分量記を書き上げている。二月二十九日に松浦藩の浦目付長嶋羽左衛門から測量方の動勢を伺い、左の内容を日記の中に書き記している。

一 測量衆ハ先触之趣ニ任、平戸領中一村毎ニ東西南北

さし渡之繩を引、海辺ハ渚之地形ニ應じ繩を引、島々

周囲も請持之所々ハ繩引いたし、寺庵ニハ一々山号を記其外条々共ニ草案之旨ニ任候而、村々ハ之書上を

出来置、大村領ハ近日平戸領ニ入込被申候時分、役人

持出候而大村領ニ而差出候處、書面之内彼是注文所なと有之、再三書改候而先ハ請取ニ相成申候

一 測量衆旅宿之義、本陣二軒、下宿一軒、成たけニ

八畳二間以上之家を手当いたし、本陣ニハ領主ハ

幕、提灯など設申候所、此等ハ他所ニ遠候と丁寧ニ有之、痛入被申候趣ニ候得共、やはり其通ニ取斗候

一 山付之在方ニ本陣を設置候處、彼方不勝手ニ候哉

俄ニ濱付ニ宿替と相成、諸事大ニ混雜ニ而、湯殿、雪隠

等迄もかかへ直し、殊外及迷惑候

一 測量衆一行ニ駕籠三挺有之、勘解由殿へ鑓為持被申候、都而測量之節ハ股引着いづれも紗服と相見候、晴雨を不厭日々之測量故面鉢などけしからず黒を付申候

一 一行分之雨具日々其場所ニ手当いたし候、尤上之分ハ木履傘、下之分ハ紙合羽菅笠ニ而竹馬ニ付けいづれも領主之手当ニ而候

一 日々料理一汁三菜位、尤禁好物も無之候、昼飯ハ二度も被相用候義有之、是ハ弁当仕立ニ而候

一 料理賄方ハ町人請負ニ申付、飯米、塩噌其外干シ物之類ハ申ニ不及、料理道具鍋しちりんの類迄釣臺ニ乗セ日々運送いたし候

一 茶弁当之様成物日々ニ付廻り、且ばんこニ毛センを添是又持廻り休息之所々ニ而、用を達し申候

一 都而村々境目々々ニ而、代官上下着、庄屋相添一村ツ、ニ而迎送いたし候、但其所々案内之者数人罷出、測量

之節付廻り、一々案内いたし候

一 領中老州迄附廻役牧山仁兵衛義、旅宿ニも見合ニ罷出候と相見候

一 納戸方と唱候役人一手ニ三人ツ、相附置、諸事之運送下知いたし申候

一 ほんてん竹一手ニ貳拾本ツ、用意いたし候、初ハしぼり紙を用、又ハ木綿を用候得共、雨天之節不宜候連

今程ハ鮑屑を相用候

一 間縄も追々損し、葛など被相用、今程ハ鯨の

ひげを用ひ被申候

一 都而海辺之測量と相見、日々之小船拾艘二十艘も差出、水夫貳三人乗り、測量衆乗り船ハ天幕を張り候而、水夫四人乗りニ申付候

一 二間斗り之竹の階子用意いたし、あゆミ板相添

一 船ニ相用し瀬ニ依、階子ニ而上り下り有之候

一 星量り所ハ止宿之庭ニ而、二間程之柱を二本

建有之候、如何被致候哉見不申候、柱之立所なと極而彼方ニ注文ニ任候と相見候

一 平戸測量之様子、海辺を二手ニ分レ、又街道

一 老筋を測量有之候而、九十九島と唱候而、島々多至而日数込被申候

一 凡一日ニ海辺ニ三里之間測量有之候、老州

一 海辺渚を伝ひ三拾里余有之、先日浦々々之

一 書上を以被相考、渡海之上凡日数十日程ニ而

一 老州ハ可相済、対州ハ周廻八十里も可有之哉

一 日数三十日程ニ而ハ可相済なと々噂有之候由

一 牧山仁兵衛申聞候

一 泊宿之義、二里三里ニ而旅宿を設候義ハ何分

一 難出来候、老州ハ八ヶ浦ニ而候故、則八ヶ所ニ旅宿

一 取設置、一宿ニ二夜も泊り被申、其所々手近キ

一 方へ止宿し積りニ而候

一 日々出役之刻限、惣夫なと明ケ七ツ時ニ差

一 揃へ、未明ニ出立有之候、昼ハ早く被相仕廻八時

一 頃ハ皆々引取申候、日ニ依而ハ昼頃ハ被相止候

一 義も有之候



一 沓州之義、郷の浦へ渡着之上ニ手ニ分、専ら東面并街道なと測量有之候而、風本<sup>ら</sup>対州江

被罷渡、対州相済風本へ被罷帰候上、沓州

西面之海辺<sup>ら</sup>平戸領五島ニ係候島々段々ニ

測量有之候而、五島領ニ移り被申候様ニ相聞候

又ハ沓州一円ハ此度不殘可相済哉、願くハ二折ニ

不相成様ニと希候得共、彼衆注文次第之事也

対州<sup>ら</sup>直に五島と申触面ニ而候得共、とかく

対府<sup>ら</sup>ハ沓州風本泊船之場所ニ而、夫<sup>ら</sup>

五島迄も所々泊船之浦々を伝候義、買船

ニ而も其通之事と相聞候へハ、対州<sup>ら</sup>直ニ五島へ

渡海可被致様も有之、殊更平戸衆も五島ニ

添候島々また大分残有之候段、旁以対州<sup>ら</sup>ハ

風本迄御送り被成候ハ、夫<sup>ら</sup>先キハ又々此方ニ

引請可申事かと存候、是等も測量衆注文

ニ任セ候心得ニ而御聞候

一 御朱印を所持被致居候哉、御朱印臺と唱

旅宿毎ニ清キ三寶一ツツ、致用意候

一 星量りとやらニ入用之由ニ而、旅宿毎ニ清キ行燈

ハツツ、致用意候、丸行燈と申事候得共、在方などニハ

在合兼候故、角行燈を手当致し申候、尤旅宿之

野向キ間毎ニ用候行燈<sup>ら</sup>ハ別ニ八軒之用意ニ而候

一 本陣之本座ニハ燭臺を用、手燭一ツツ、相添申候

一 提重一組不見苦を用意致し候得と城下<sup>ら</sup>申来

居候、是ハ昼弁当代りニ、時として見合差出候かと

相察居申候

一 当所着船之節ハ我々共上下着ニ而出迎、旅宿へ之

手引等ハ下役共案内致し申候

一 日々之船夫、測量之縄取、諸運送彼是之夫高

一日ニ六百人並ミニ召仕候、其外豫メ旅宿何角之取設

第一村々渚々島々浦々之縄引、書上以前ニさへ

大人之人夫を召仕申候、沓州浦方之儀近年

甚疲レ候而、様々心遣仕居候中、当節之如く多人夫

召仕候儀、去とハ当惑之事ニ而御座候

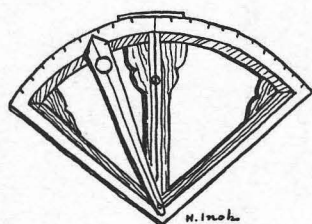
一 渡海用乗り船ニハ四拾挺立程一艘ニ而、鯨船四艘

相附申候

文中の風本とあるのは勝本の事で、勝元とも書いている。

そして、郷左衛門は武生水村郷ノ浦へ移り、三月十三日に忠敬一行を出迎えることとなる。

(いりえ まさとし)





重富先生は相当な悪筆である。かれの書簡は、伊能文書の中で一番読みづらいしろものだ。火は大だったかもしれない。はは、者という字のくずしで、良という字のくずし、らと似たものもある。

また親友、至時宛の書簡のせいで、いかにも上方の質屋の大旦那らしく、重富はしゃべり言葉を多用する。「かんしん、かんしん」、「おんにさせる」「につくきやつ」「どきどきいたし」「いや〜に御座候」「大しくじり」「はなにてあしらい」といった調子である。「大法螺を吹く」などという俗語を大学者が使うはずはないと、写し手は考えたのではなからうか。

もと東京天文台長の広瀬秀雄は、先学が「大ぼら」の誤写であろうと言われるのを聞いて、この意見は正しいと思い、「かの大ぼら」について、『忠敬が相変わらず全国測量という夢のような大法螺を吹いて、だれかれの意見を求め、かつ自分でも大笑いしていたと解すれば、話の筋が通るように思っている』と述べている。

伊能忠敬は、早くから広域測量の壮大な夢想を胸中に暖めていたことになる。

### 並外れた根気

また右書簡の引用から、忠敬の勉強の進みぐあいも分かる。出府後第二段階の『暦象考成・上下編』から始めてこれをマスターし、一年半でカリキュラムの最高段階、『暦象考成・後編』にとりかかっており、「ゆっくりとですが、分かるようになりました」というのだからたいしたものだ。

彼の勉強振りは確かに並外れていたようである。『星学手簡』を編集した至時の次男、渋川景佑は、伊能忠敬の短い最初の伝記、『伊能翁見聞記』を残した。彼は後の文化二年、まだその名を高橋善助と

いったころ、第五次測量隊に加わって一年八ヶ月忠敬と行動を共にした。十九歳から二十歳にかけての感じやすい年頃で、忠敬の強烈な個性は、この次世代の天文方の重鎮に、忘れえぬ印象を与えたにちがいない。この『見聞記』は史料としてかなり信頼できるといってよからう。「根気のよい事、人として及ぶものがなかった」「手を空にする」と、人の怠惰なことを嫌い、度が過ぎているという人もあった」として、次の有名な文章が続く。

### 史料 二

『伊能翁見聞記』 渋川景佑 述

『伊能忠敬の科学的業績』より

(前略) 西洋暦法を教えられ、床につくのも忘れて長年の疑問の数々に解答を得：『暦象考成 後編』を用いて、二三年分の暦の作成や、日・月食の予報計算ができるようになった。至時先生も翁の根気に感嘆して、たわむれに「推歩先生」とあだ名をつけられた。

後に測器が揃うようになってからは、外出を好まず、朝から出る時は、屋前に帰宅して太陽の南中を測り、午後に出る時は、夕方には帰って星測を行い、曇りの日でもなければ、ゆっくり対話なさることもなかった。至時先生と暦理の話で夢中になり、うっかりたそがれ時に及んだりすると、慌てて取るものも取りあえず帰宅され、脇差を始め懐中物などお忘れなさるのが常であった。…よって偶然、白昼に金星の南中を観測された。これは、わが国で金星南中を測った始めである。

(後略)

(推歩：天体の位置計算のこと)

年をとり、アカデミックな基礎も持たぬ伊能忠敬が、「他に及ぶものない根気」によって勝負しようとしていることは、明らかである。そして、偶然に、金星南中の本邦初の観測者として、記録に名を残す結果になったのである。

大法螺吹きと無類の根気もの、夢想家と「高貴さにまで高められた愚直な精神」の持ち主。この一見相反するようにみえる二つの像は、いったいどこで重なるのであろうか。

#### 四万四千キロメートル

「寛政の改暦」をやりとげた高橋至時は江戸へ、間重富は西の観測を任されて大坂へ帰り、場所を入れ替えて二人の交信は続く。

忠敬登場の第二シーンは、寛政十年三月である。至時は八日付けの長い手紙の最後に「さて勘解由（忠敬のこと）は、この節不快の由で、長いこと顔をみせません。節句に使いの者をよこしました。私も忙ししいし不快でもあるので（彼は結核を病んでいた）、江戸へ帰ってから深川を訪ねておりません。例によって観測のやり過ぎだろうとみんなで陰口をきいております」と書き、重富からの返事には、「勘解由、例の観測し過ぎで不快の由、彼らしいですね」と書き添えてある。

同じ寛政十年十月十六日、月食があった。江戸・大坂ともまずまずの天気で、それぞれ観測値が出たが、江戸では人によりバラつきがあった。月食の精密測定は難中の難だったようで、翌月至時は「測りながら不安で、疑わしく……月食は苦しみもの」と大坂へ訴えている。

#### 史料 三

高橋至時書簡 間重富宛 『星学手簡 十三』

寛政十年十一月二日

（前略）勘解由の測は、私の値に近かったのですが、この人は未熟なので、参考にはなりません。……（難波屋というガラス職人が）三間の星鏡を作って持っています。まだ持っているでしょうか。まだ持っているようでしたら、いくらなら売ってくれるでしょうか。お問い合わせください。勘解由の頼みです。彼も日・月食の測り難きこと、今度

よく分かり、もっと大きく見える星鏡が欲しい由です。（後略）

至時先生は厳しい。しかし忠敬も一生懸命である。高そうだが、よい道具をそろえて、不休の「推歩」を続ける覚悟なのだ。

\*

この熱意と根気強さは、後年の伊能図を髣髴とさせる。

保柳睦美は複雑な計算の結果、「伊能隊の測量旅行距離は四万四千キロに近く、地球一周を遥かにこえている……。また忠敬自身の旅行距離だけでも、三万五千キロ近くに達している（一日の測量を二、三班に分けて行ったり、最終回のように老齢による彼の不参加もあったからであるが）。忠敬の年齢を考慮外にしても、個人的にも、あるいは同一人が指揮した測量隊でも、こんなに長大な距離の測量旅行を実施した例は、世界の測量史を通じて全く類をみないものである」と述べている。しかも平地ではなく、ほとんどが海岸線の難所だった。井上ひさしが「高貴さにまで高められた愚直な精神」と表現したものが、これなのである。

#### 忠敬の学力

『伊能忠敬の科学的業績』のなかで、編著者の保柳睦美は、伊能忠敬の学力について、概略次のように指摘している。

「一流の学者を師とし、これに加えて一流の学術書で、その年齢からは想像もできないくらいに根気強さで勉強しながら、なぜ忠敬は学者にならなかったか……当時の天文・暦学の理論的發展にほとんど貢献していないことは明らかである。……彼はよく勉強したが、独創性を要求する理論的研究には、あまり関心を持たなかった……彼は実行を主とした人であり、あの大事業を完成させた最大の根源は、その根気強さ



にあったのである。：学問の上では鋭い頭脳の持ち主であったとは思えない。したがって忠敬を科学者とみることは大きな誤りである。：逆説的にいえば、もし忠敬が科学者としての方向に進んだならば、伊能図は生まれなかったにちがいない」と。

そして、「忠敬の師である至時や重富の麻田派の天文・暦学の成果も、明治維新後はまったく放棄され、ヨーロッパから直接に輸入された科学技術に、一挙に置き換えられてしまった：しかしこのもとの基盤からの、傍系的成果である伊能図はあとまで残り：二人の師の業績は、忠敬の根気の成果である伊能図を通じて：その背後において生きていたといえるのである」と結んでいる。

先日「伊能ウォーク」出立式のため大阪へ出かけたとき、市立科学館の学芸員・嘉数次人氏にこの点を確かめてみたが、やはり「二人の師の骨身を削るような研究の成果は群をぬき、当時では最高の水準にあった。一方、伊能忠敬は、最終カリキュラムの『後編』の理論までを、完全に理解していたかどうかは疑わしい」とのことであった。

\*

さて、この辺でまた二人の書簡集にもどってみよう。

寛政十一年の往復書簡に、忠敬登場のシーンはない。もっともこの年は、「伊能図の三人」となって、大忙しの年であった。

一月に幕府は蝦夷地を直轄とし、防備・開発計画を立てた。そのためには蝦夷地の正確な地図がどうしても欲しい。天文方暦作手伝いの堀田仁助に測量させたが、奥州東海岸と蝦夷地南岸を船で略測したのみで、あまり役に立たなかった。やっとチャンス到来である。

緯度一度の距離をつかみたい至時先生は、根気で勝負しようとしている忠敬の「大法螺」にのってみようかと考え始める。

五月に至時の先生、天才麻田剛立が亡くなった。何くれとなく葬儀

の面倒を見た在坂中の重富先生は、貧窮した麻田家の形見分けの品を至時先生に贈り、「粗末なものです、印までに受け取ってください。私も断るのもかえって：：と思ひ、受け取りました」と書いている。

一方江戸では、天文学上の目的を隠して幕府の要求を利用しようとしていた至時・忠敬の師弟が、桑原隆朝をパイプ役として、幕閣を相手に、押したり引いたり、なかなか巧妙な立ち回りを演じていて、たいへん忙しかったのである。

\*

寛政十二年、いろいろの障害を克服して、伊能忠敬一行はついに蝦夷地測量に成功した。次の登場シーンでは、忠敬が主役である。

#### 史料 四

高橋至時書簡 間重富宛 『星学手簡 二二』

寛政十二年十一月十日

(前略) 勘解由一同、往返とも何の障りもなく、先々ご安心下さい。江戸から泊り々々北極出地度を測り、蝦夷地でも恒星の高度を測ってきました。感心にも、江戸より蝦夷地「ニシベツ」という所までおよそ四百二、三十里、少しも残さず足数を記録してきました。大骨折りというほかありません。道路の屈曲は三寸五分の指南針で方位を測り、所々高山も測って帰りました。もっとも右の測り方は、すべて私から指図したのですが、これほど全行程の足数に洩れがないとは思っていませんでした。よくもやり遂げたものと、驚嘆いたしました。

ただ少し残念なのは、せっかく持っていた新しい方位盤があまり大きく、蝦夷地に入ってから「持ち人足」に費用がかかるため、箱館という所に残しておき、杖先指南針だけを使って測った事です。このこと、あまり残念だったので、つい「いらぬ儉約をして、肝心の測量をおろそかにした」といって叱ってしまいましたところ、「一言もありません」と詫びておりました。しかし内心では「ここまでやり通す

とは……」と感じ入りました。なにしろ二尺五寸の方位盤は、人足も四人がかりで費用もかさみ、強いて使えと命令する訳には行きません。こんなに儉約しても、道中の費用は、百両持って行ってわずか一分しか残らなかった由。お手当では二十両ですから、道具代・支度料を除いても、八十両も自腹を切ったことになります。(後略)

この第一次測量の上程地図は、本誌十八号に載せてあるが、「かれい」をなめるように食べたあとの中骨(奥州街道)と鰻(北海道南岸)のような形をしており、中骨部分の右には浅草磨局から、幸手、間々田という風に、ニシベツまでの歩測による距離と北極星の高度表が中骨と同じぐらいの長さにビッチリ書き込まれている。

これでは、さすがに厳しい高橋至時先生も、脱帽せざるを得まい。

### 忠敬の野心

伊能忠敬は、なぜこんな難業に身を挺したのだろうか。答えを出すのは、なかなか難しい。

地理学者、保柳睦美の編著「伊能忠敬の科学的業績」は、物理・測地学者、大谷亮吉の「伊能忠敬」に大いに注文をつけた書物である。

大谷が、『私は幼時から高名出世を好みましたが、親の命令で佐原へ養子にゆき、好きな学問もやめ、産業第一にし……功成り名遂げて江戸へ隠居しました所、史上初めての日本測量の御用を命じられ……』という娘宛の書簡から、忠敬は『高名出世の初一念を貫徹したるに外ならず』と決めたつたと、保柳は批判する。『高名出世』などという『世俗的な心情』では、あれだけの大事業はできない……と。そして彼を突き動かしたものの実体は、『測量が好きで……執念ともいえるくらいの熱意と根気と頑固さ』をもっていただからだと答えるのみである。しかし思うに、これらは性質であって、彼の内なる炎とはいえない。

私はこの点については、大谷説に全面的に同意する。

重富先生が後年『人の目を覚ますような事を成し遂げなければ一生の学業は完結しない、という覚悟が出来ている』人物と評しているように、伊能忠敬は強烈な功名心を懷いていた。証拠はたくさんある。

伊能忠敬が江戸後期の商人であったことを、決して忘れてはならない。江戸後期の知識人は、下層武士・商人・上層農民・僧侶・神官・医師など雑然とした階層からで上がっていた。特に商人は財力もあり、自然の動きをじっくり観察し、合理とは何であるかを身極める力を、それまで唯一の知識層であった武士階級から奪い取りつつあった。大坂の「懷徳堂」はすべての人々に開かれており、商いの「利」は公正であれば、そのまま「徳」であると教えられた。商業活動には公然たる市民権が与えられつつあった。間重富と共に伊能忠敬が、「武士がなんだ」という気概を持っていたとしても当然である。

彼の嫌った中身の無い「名聞」は、世俗的心情かもしれないが、中身のぎっしり詰まった「名」なら、なぜ求めて悪い事があるうか。

大法螺吹きと無類の根気もの……。この二つの像の重なった所には強烈な野心があって、これこそが、根気強さを武器に、夢想を現実に変えたのである。伊能忠敬自身にあっては、全国測量は決して「大法螺」ではなかった。

(つづく)

### 参考文献

- 有坂隆道『寛政・享和期における麻田流天文学者の活動』創元社
- 保柳睦美・外『伊能忠敬の科学的業績』古今書院
- 中島誠『江戸商人の知恵囊』現代書館
- テッオ・ナジタ『懷徳堂』岩波書店

伊能忠敬の  
江戸在住日記 三

佐久間 達夫

原本 忠敬先生日記 十九 続き

文化四年(一八〇七)一月二五日

夜前より朝雪、四ツ後迄少し雪降る。午後より晴曇。夜曇。

一月二六日

晴天。須田久米治郎より廻状。

以廻状申達候。然者、来る二七日修理殿方故障有之初逢対延引相成、二九日初逢対被致旨。例之通り服紗小袖上下着用例斎可被罷出候。廻状刻限付を以て早々順達從留りて被相返候。以上。

正月二四日

須田久米治郎

神田誓願寺前

吉本直三郎

神田お玉ヶ池

村田忠治郎

下谷三枚橋通中御徒町猪飼

持三郎地内

津田亀五郎

下谷坂本入谷村矢右衛門地内

原田伊右衛門

神田岩中町代地黒木閑斎方

伊能勘解由

本所北割下水同心町池谷藤

田中岩治郎

右衛門地内

井手清五郎

下谷山伏町

匂坂藤太郎

神田山本町代地

河内山宗春

留廻状に付、九ツ後須田久米治郎殿へ帰す。

一月二七日

朝より晴天。昨夜下河辺来る。

一月二八日

晴天。午後浅草へ行く。高橋、問も他行。

一月二九日

晴天。六ツ後逢対に行き、御成に付永代橋通り不成還待御成通り五ツ後に行逢対済て諸人帰る。世話役衆払成りて御登城出に逢対済。それより須田久米治郎へ立寄る。須田氏も病氣願にて組頭役を辞退するよし。帰りがけに須原屋茂兵衛、松川一方に立寄る。午中少し前に帰宅。此夜下河辺来る。

一月三十日

晴天。七ツ後浜町元矢倉芝山源三郎より廻状。

猶以来二月朔日より亀田三郎右衛門方にて明き申之義相心得候間、左様可被心得候。

以廻状申達候。然者、須田久米治郎就病氣願之通御役御免被仰付候可被得、其意候。且、跡役被仰付候迄者、不依何事諸事自分方へ可被申聞候。

右之通被相心得廻状刻限付を以、早々順達留より可被相返候。以上。

正月二九日 浜町元矢倉 芝山源三郎  
即刻七ツ後、本所三ッ跡鐘堂下宮本弥三郎

遣す。

追而、渋谷新之助駿河台鈴木町、矢部主膳地内住宅にて候。已上。

以廻状申入候。然者、須田久米治郎跡御役今十四日渋谷新之助被仰付候間可被得、明細書、屋敷書付早々新之助方へ可被差出候。廻状無遅滞刻限付を以、早々順達留りより可被相返候。以上。

二月十四日

亀田三郎右衛門

二月十五日

晴天。子午線を立てる。

二月十六日

晴天。世話役岡村半平へ明細書、親類書下書に書状を添え、子之吉を遣す。返事来る。

二月十七日

晴天。

二月十八日

朝より晴、午後より晴曇風。八ツ半頃大曇風。八ツ九分頃組頭渋谷新之助より廻状。

以廻状申達候。然者、於自宅組中為引渡来る二一日尽九ツ時月番同役相越候間、各方麻上下着用、右刻限可被罷出候。老衰幼少病氣差合等之面々者、其節所申聞、名代可被差出候。尤、右名代等之義者世話役中へ可被申談候。廻状刻所を以て早々順達留りより可被相返候。以上。

二月十八日

渋谷新之助

二月十九日  
曇る。

二月二十日  
晴天。

二月二十一日

晴天。四ツ半頃より駿河台鈴木町、渋谷新之助行き、逢対に罷越す。七ツ頃帰宅。

二月二十二日

晴天。会田算左衛門へ行く。それより曆局に行き、桑原翁へ立寄る。

二月二十三日

朝より午後迄雪降り積る。一寸。坂部氏来る。

二月二十四日

晴天。

二月二十五日

晴天。測量用物調べに出る。

二月二十六日

曇晴。坂部内倉へ行く。

二月二十七日

曇晴。午前中後晴。

二月二十八日

曇。坂部来る。飯高惣兵衛より書状。並びに金子小網三丁目久住五左衛門より届く。

二月二十九日

朝より雪、午後には及ぶ。しかし春雪積らず。

二月三十日

晴。

三月朔日

晴。厳島、天橋立図、琵琶湖図持参曆局へ

行く。それより桑原へ廻り八ツ頃帰る。此夜雨。

三月二日

朝雨、終日曇る。

三月三日

曇天。

三月四日

曇天。佐原屋庄兵衛来る。松野茂右衛門来る。

三月五日

晴天。暮、高橋善助、下河辺来る。

三月六日

曇天。夜四ツ後伊能三郎右衛門来る。

三月七日

晴天。午後佐原屋庄兵衛画図持参。夜雨。

三月八日

朝曇。五ツ半後晴る。浅草へ行き、紙屋五郎兵衛へ廻る。

三月九日

朝より晴天。

三月十日

朝より晴天。高橋作左衛門殿御勘定所へ御越。それより立寄る。尤、御手当減少御相談。

三月十一日

朝より晴天。伊能三郎右衛門大師河原へ参詣。夜に入て帰る。

三月十二日

晴天。

三月十三日

曇天。昼後佐原屋、厳島画持参。

三月十四日

雨、四ツ頃迄降る。午後晴。此日駒込四軒寺町大観寺前組屋敷青木勝次郎宅へ画紙を遣す。坂部より書状を添え、右同役喜多川四平方より五街道分間図御手当金書付来る。写し置く。

出達之贈

一、金三両

支度金

一、金貳歩

月割宿代

一、金貳両貳歩

月割雑用

一、金壹歩二朱

水廻

一、金一歩

見盤修復料

一、銀八分

日当り一日分筆墨紙

一、銀貳分五厘

日当り一日分画筆代

一、銭貳百六拾四文

人足式入

一、御扶持方三人

扶持五割増

右者、五街道筋、分間御用在出立中、並、帰りの節、江戸に罷在候内在出中の通り被下。在出御用相済帰府の上、跡調中者壹ヶ月金三分づつ被下。御扶持は不被下候。先日者、緩々得御意、殊に御馳走罷成難有奉存候。弥、御安康被成御勤奉賀候。然者、其節御頼の儀早速御勘定所同役共迄承候処、別紙の通申来候。左様御承知可被下候。中帰いたし江戸にて取調の内在出中の御手当請取申候由、申聞候。乍末、勘解由様へ宣御礼被仰上司被下候。奉頼上候。以上。

三月三日

坂部貞兵衛様

喜多川四平



三月十五日  
朝より曇天。此日より高橋善助、下河辺政五郎始る。

三月十六日

朝曇天。八ツ半頃より雷雨。

三月十七日・三月二十日

晴天。

三月二十一日

晴天。但し白曇。

三月二十二日

雨。

三月二十三日

朝曇、午後より晴、夜曇る。

三月二十四日

曇天、或は晴、度々小雨あり。

三月二十五日

朝曇、午後より晴る。夜七ツ頃雨。

三月二十六日

朝雨、四ツ頃止む。曇天。今朝伊能三郎右衛門帰国。

三月二十七日

朝曇、四ツ前より晴天、此夜曇る。組頭渋谷新之助殿より廻状。

以廻状申達候。然者、御目付衆被相贈候書付写。

別紙一通相達候間可被仰其意候。廻状無遅滞早々順達從留り可被相返候。以上。

御目付齊藤治左衛門、水野中務相達候書付

渋谷新之助

の写。

来る二七日、浅姫君様、山王御参宮の節、下乗所。

一、山王 表門前

一、同所 裏門前

下馬所

一、小堀下総守屋鋪角

一、内藤豊前守中屋鋪角

一、岡部美濃守屋鋪前

右の通下乗、下馬所に相成候。尤、下乗下馬相連候以後登城退出の面々は相通、其外平生の往来相通不申候。右為御心得御達申候。

三月

三月

其夜、即刻南本所三ツ目菊門町山岡百七郎へ継送る。

三月二十八日

朝より小雨、午後迄降る。午後も微雨。

三月二十九日

朝より晴。八ツ頃厳島、天橋立、琵琶湖、浜名湖持参浅草御役所へ行く。坂部、下河辺高橋善助同道。

三月三十日

朝より大曇。

四月朔日

朝より大雨、夜も降る。

四月二日

朝より曇天、八ツ半頃より天氣に成る。

四月三日

晴、夜は曇。

四月四日

朝より雨。尤、小雨。

四月五日

朝より小雨。

四月六日

朝曇、四ツ頃より段々晴る。午中晴天。又八ツ後曇、又度々雨。

四月七日

朝より曇、午中晴、それより曇。

四月八日

同断。雨あり。我等七ツ後より病氣。

四月九日

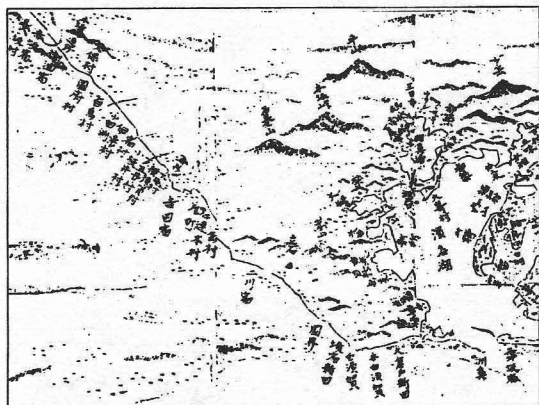
朝五ツ前より五ツ後過ぎ雨、それより曇。

四月十日

朝五ツ前より五ツ後過ぎ雨、それより曇。

遠江国浜名湖付近の下絵図

「ひとめでわかる伊能忠敬の生涯」佐久間達夫著より



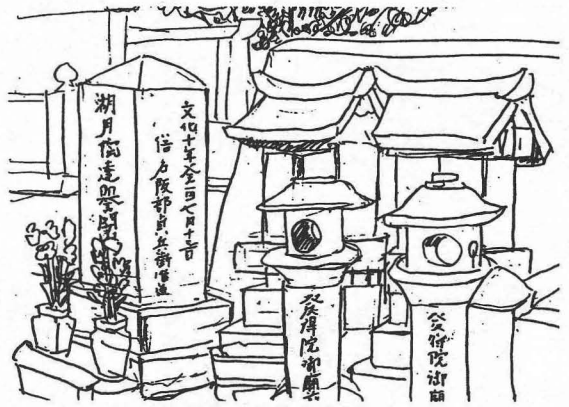
## 伊能ウォーク福江大会に参加して

本郷 靖枝

長崎空港を離陸した機は眼下に緑色の小さな島々を望み、二十数分の飛行の後福江空港に着陸した。いつか一度は福江に行つて見たい、坂部貞兵衛の客死した島はどんな所なのだろうかと云う思いを長い間抱いていたが、何と羽田から二時間足らずの空路であった。

福江の空は青かった。機外は一挙に夏であり少し動いても、じっとりと汗ばむ陽気であった。羽田から一緒に来た伊能さん、浅井さん、江口さんと私達二人、誰も遙けくもとうとう来てしまったとの思いであった。空港には、研究会員の野さん始め、博物館、観光協会の方々が出迎えて下さった。

伊能ウォーク福江大会は七月二十六日雨模様の中で予定通り行なわれた。それに先立つ午前八時頃から宗念寺裏の墓地で貞兵衛の墓前祭が執り行なわれた。宗念寺はそれ程大きなお寺ではなかったが、木々に囲れた誠に静かな佇いの寺で、貞兵衛の墓は五島藩の家臣、貞方氏の墓地の一隅にあった。立派な墓石が建っており「湖月院達誓關山一空居士」との戒名が刻まれていた。それにしても御用測量とは云え、忠敬の従者であった者の墓にしては思いがけない程大きく立派なものであり、又二百年に亘つてこの地の人々に守られてきたことに、本当に感激を新たにした。貞兵衛は文化十年第五次測量からの参加であり、六十六日をかけてこの島々を測量したと云う。六月二十四日測量日記には貞兵衛が「風邪で引籠り」と記されているが、七月十五日死去する迄僅か二十日余りの短い期間であった。気力も体力も一番充実して



福江島・坂部貞兵衛の墓  
(江口俊子のスケッチブックより)

の末裔の方々と遭遇した。これも忠敬の貞兵衛に寄せた信頼と熱き思いのなせることであつたのであろうか。

当日のウォークは、鬼岳を経由して、コンカナ王国で昼食、武家屋敷辺りを歩いて市役所に至る起伏に富んだ十五キロの道程であつた。どの場所に於いても福江の皆さんの暖い心遣いと準備が感じられての大会であつた。

ところでこの大会に先立ち、資料館で貞兵衛の忠敬に宛てた書状十通が、伊能さんにより福江市に寄贈された。この貴重な資料が今後忠敬を研究する人達の多くの人の目に触れる様になれば良いと思う。

長い間抱いていた福江への思いは、忠敬ウォークに参加する機会に恵まれ、心暖る多くの人達との出会いと、偶然の連続で本当に満足のいくものであつた。感謝である。  
(ほんごう やすえ)

いるであらう四十二才の死は何と云つても哀れであり残念でもある。

私は、佐原を出発する前日、忠敬の菩提寺である観福寺に詣で、墓石前の土と少しの水を持参した。ご住職の読経される中、貞兵衛の墓石に水を注ぎ、土を供えた。やつとこの地に來られたとの思い一入であつた。又、誠に偶然の事であつたが、墓参に見えられた貞方氏

## 入会案内

「伊能忠敬研究会」は次のような活動を行います。

- ① 本会報の発行 年三回 交流誌 年三回。
- ② 例会の開催 講演会、発表会、各種史料、伊能図の展示説明会、見学旅行などの例会。
- ③ その他、伊能忠敬に関連するさまざまな事業。

## 入会方法

住所、氏名、職業、関心分野、電話、ファックス番号を通信欄に記載の上、郵便振替にて入会金四千元、年会費六千元を「郵便振替口座〇〇一五〇・六〇七・二八六一〇 伊能忠敬研究会」あてにご送金下さい。

## 投稿規定

● 会員の投稿を歓迎いたします。原則として一回の掲載は四頁以内とし、越える場合は分載します。原稿多数の場合、採否は編集委員にお任せねがいます。また、編集委員から一部変更をお願いする場合があります。

● 一頁は、二段組三十一字×二六行×二段で一六一二字、三段組二〇字×三〇行×三段で一八〇〇字です。タイトルと写真はこの中に含めてください。また、提出した原稿は必ず控えをおとり下さい。返却は致しかねます。

● 伊能忠敬研究会・ホームページ

URLは、<http://www2s.biglobe.ne.jp/~auto/inoh.html>

担当 大友正道

\* 本誌の編集委員は次のとおりです(五〇音順)

安藤由紀子(元国会図書館憲政資料室)・伊能陽子(伊能家)・香取禮良(元佐原市教育委員会次長)・小島一仁(佐原市史編集委員長)・齋藤仁(学習院女子大)・佐久間達夫(元伊能記念館館長)・清水靖夫(法政大学講師)・芳賀啓(柏書房代表取締役)・渡辺一郎(株サンコミュニケーションズ取締役会長)

## 編集後記

● むかし世田谷の伊能家で、こよりでしばった古手紙をほどこいて、測量副隊長だった坂部貞兵衛の忠敬宛書簡十通を見つけた時のことを思い出します。現場の苦しみのなまなましい表白でした。私はこの壮年の江戸時代の男性にほれこんでしまい、早速五島出身の友人坪井隆治氏の橋わたしで福江島を訪れ、坂部の墓に触れて来たのでした。

伊能ウォークの福江上陸を機に、これらの手紙は、伊能洋氏から福江市に寄贈されることにきまり、彼の墓どころ、「歴史の島」五島に安住の地を得ました。

坂部の墓前祭出席を前から楽しみにしていたのに、出発四日前、交通事故にあいました。頭は大丈夫のようですから、大好きな五島を再訪のつもり。坂部さんの手紙にお別れを言わねばなりませんから。

(安藤)

● 福江島の興奮もさめやらぬまま屋久島へ飛び、伊能ウォーク大会にあわせての、上屋久町建立「伊能の碑」除幕式に参加させて頂く。鹿児島空港からプロペラ機に乗り換えて、穏やかな海上を越えながら、何日も山川港で風待ちをしていた測量隊に申し訳無く思った。土地家屋調査士会の地図展に、地元の受け入れ資料が初公開され、「坂部貞兵衛様 御宿」の木札まで見せていただき、ここまで来てよかったとしみじみ思った。すっかり「島」に取りつかれている私である。

● 諸事情により、この号まで従来のスタイルでお届けすることになりました。ご了承ください。

なお、仲田氏の原稿が次号送りになりましたことをお詫びいたします。

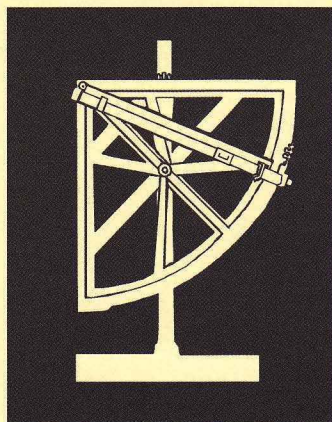
(伊能)



# THE INOH TADATAKA JOURNAL

## STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.23 2000



### ESSAYS 1

- Walking with Dreams ..... KATO Go 1

### TOPICS

- Pace Measuring Rally ..... FUKUDA Hiroyuki 4

### MATERIALS 1

- INOH'S Survey along the Bo-So coast ..... WATANABE Takao 6

### ESSAYS 2

- Nampa Walking ..... OGIHARA Kazuteru 12

### FROM VISITORS' REGISTERS

- INOH Yoko 13

### MATERIALS 2

- Reading Documents in Sawara 5 ..... KOJIMA Kazuhito 14

- Documents in Soh Family Library ..... IRIE Masatoshi 19

- Family Document 16

- Three Persons ..... ANDOH Yukiko 24

- INOH'S Diary in Edo 3 ..... SAKUMA Tatsuo 29

- Fukue Rally of the INOH Walking ..... HONGO Yasue 32

- OTHER NEWS ..... 33

Edited and Published  
by  
THE INOH TADATAKA SOCIETY